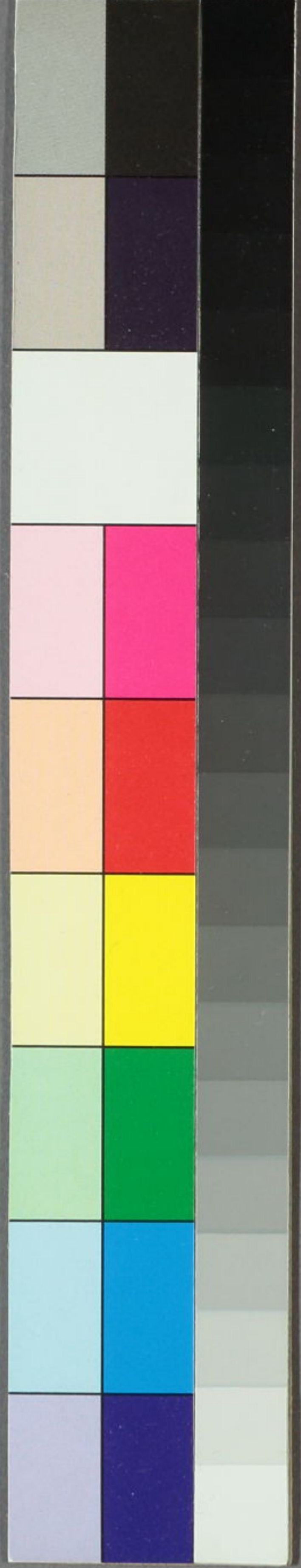


研詰古今抄

再撰
貞享
三



○ 年号とありし新とある物也事

むらり連証の式より序しすおのるをある
 およそ一をとめて一をすしついで同まらざる
 又向去ありたりたれと是と此は合ふまは向
 の言しある時と年月一い右よ今此能潜の事秋を
 例のめ向去ともなむいさくご向去しまはま
 一各月の能重と論するに各厚向よとれは年と
 ありて年向よとれは新とらるおありおる名れ
 のし中に○まを皇の業論ありしとまはま

一おまあるし新字は子の動とありし新の業を
 なるたれし一水等の業はと合しなれし例の
 浮葉ハ新なりともしとらるれ水等のおある
 じしししも業とたれし水等の業はと合し
 かるし新も年とも用いたむしつらとたおの
 とも水等のと合しとたれと合しと合し
 つしと右はうりし新也とそれの能重の野のし
 おお物なりし新とらるしと合しと合しと合し
 ありしと合しと合しと合しと合しと合し
 ありしと合しと合しと合しと合しと合し

せと新とて。こゝれとてさくらぬ。○るを朝日此
 以燈より裕單に揚る。扇圓に扇圓水とむまふと酒と
 共へて古抄よる。さしあされとて水の清浄と稱され
 いと詞も及さん。古抄を以て新とて。これとて
 ら各段句も。ま句も。よとて。能治のま語とあれい
 これとて。兩用の第一とて。つむ。川。持。り。て。二。系。ま。後。り
 て。中。遊。の。對。あ。れ。い。ま。子。ま。新。も。用。て。せ。○。秋。と
 灯。籠。と。よ。れ。あ。り。初。め。と。清。て。盆。の。年。或。あ。れ
 灯。籠。と。つ。い。ぢ。り。と。ま。ま。も。新。も。用。て。一。燈。籠
 と。威。放。と。さ。ら。秋。と。は。つ。ま。り。て。も。と。放。と。い。

例の之用とて。さくらぬ。に。お。遊。と。つ。詞。な。ら。り。新
 の。名。あ。ら。う。ま。句。の。新。と。句。備。と。ま。秋。の
 二。系
 一。用。り。り。例。の。家。議。と。う。り。○。冬。と
 扇。裏。ら。り。初。め。と。清。て。ち。ら。と。古。抄。と。お。ふ。と。も
 つ。る。貧。富。の。兩。用。よ。り。時。と。屋。と。ら。お。方。も。か。ら。る
 ま。一。櫛。と。か。ら。り。冬。と。あ。ら。う。山。家。此。用。よ。り。新。と。て。せ
 燈。火。と。ま。一。て。を。行。の。赤。と。て。金。輝。子。と。句。鐘。と。も
 よ。り。一。つ。れ。と。夜。息。蒲。團。踏。皮。江。中。の。お。と。ま。り。二。用
 と。あ。り。ま。一。や。古。抄。と。孫。と。冬。と。は。つ。と。ま。れ。と。婦。帽。と
 と。し。も。新。と。て。一。用。あ。ら。う。一。て。あ。ら。う。一。衣。と

脚と脚中も氣血のるまよふるおあれたるおえよも
 系湯もよく物と新俗のおうこり新し打つ時
 とあに例の同をよとつてむくくもなれと破笑
 の虚宴としてあや○今将まるれば或のいれをま秋
 の例のご入句よはいつてまお節の目よきといはれ
 あんまきとあぬくく一白ちかれきといつて年人の
 三節一むとい老人と清田よ病ありくといつてむ
 一古おの望情の用と今もよきと名目と母の
 ぬいもつてまお節よちるおあぬ一むといつて句
 一も用とまといつてむかたあつてむかたあつてある

答也まといつて句よもまよとつてむかたあつて
 方法の互向まよあつてまよとつてむかたあつて
 一いつてとつていれと新ありと打懸も同をよと
 ちよもやうとまお節よ及つてんぬまといつて一は
 かつて古風の所はよつてはよ新家の實制
 むうら代行よむらう一安謀とつてむかたあつて
 ときもるまといつてむかたあつて

○ 各所へ新の發句は事

一和音は撰集も新らふおあれは新報

とらふとありて連能りもさ名と傳へるは能
くといふと傳へる新の義向とさ傳へくの内
四季の節をさし曲節とて一〇今持とて
各所へ新の義向とて一〇今持とて
その向系の情とて一〇今持とて
とていふ義情はかたきとて一〇今持とて
本心持の心なり

あさふらと傳へるは能
かくとて傳へるは能
その心なり

伊賀のゆるり馬の行輪らちなりて

からさくはたつま坂とて馬車哉

けしむらるはこれのくは能のさくは牛もあるは
とてさくは能の服もありてむらるは能の運
しはらるは能の心なりとて各所の新はかく
とてさくは能の心なりとて能の心なりとて
ありてさくは能の心なり

かくはらるは能の心なり

けしむらるは能の心なりとて能の心なりとて
源氏よりさくは能の心なり

と扱てかくトもれい船半と音字ありて
次ニあり此用はあつとこれと新解のや
心むる取はひおと作一とおあ一りあま
あつと及り又あると老懐の詩意一

年くや猿もさる猿の面

け句らぬり一と遊年のことと猿をく控ふる
義且の詞あくれいそと一新解のや心むる
可も季格のや心むるれ一新一といひ新解は
りひ可も季格といふの新制を一これと今
の能指の名目とらふも

蓮ニ云け照のおほねい白馬の類説一和
て先師の遺稿もも教をとりてと也先師の人和
り御一りあるも軍書もか書也と子
句と一と時の起り一難解あり一と陳の詞
故翁と富士書師の今對一と我一略の
作ありと頁を老人此ととく一書也と
はくさる各句ゆ一むとおさるしれいちり
さるるとも家の門人らと金一と此の翁自
を序んら路と解とまるれもあんと一先師
いけ新と扱とれ一と海一祖の詞と傳と

富士と云きとおるる一く苦也いふ也とおる
一むむうううにける句の音とおしつる一
一能々の腕力とおしあて解束のまねとつふ
一これに授名のおるる一ううにけはせも介
新向も新野も先師の遺行もあましくあら
中々樹や又殊のらまは美に舞舞ぬんとい
くまらるめさや一雲の山け二句と笑の金塔
うう百部の撰集一は一や一新一部とされ
一うふ草と天の橋立の名はあま又殊のや覺
と云あり也後章と云ふ山と云ふ名にいきなり

越中と謎語とふとる也但しおまのらと越中
のさふとりのおのふ殿とつうとせとおあ
く一集より遠く部あり一は一は一は
もあそ一棉車ぬとまると後と密のごう具
け二句より思あり一あはち女恋とあり一
先師の句あり後い傾城恋とあり一秋と坊
作あり一集の部をら右と集よりあつ一は
これ一と和語を此件ある一おあ一く新一部
のあつ一は一は一は一は一は一は一は一は
けるら獅子座のご詠ある一ううはらおあ

へ新のふらひる名あつらん多しあるとれは有句
と服に起まの二格とい用あらんとい録と相
と強くいこしとて付れへ劍さりとていふ
の向しあがりてふとねは親おの親あんと二飛
の裏誦らけりまらぬかくりあて七浦の言も
け服の録の相も有句と時の奥に言ひて
かくもさといれと服に書用のらそきあんと
授まらも服の付はあらんらとれ今れは或
あつぬととの言又と筆言といあつたか
今れを親あつと彼子誦言此新しあとい

おれらの名目ともお月も一とてやおろし
と和言此公論あれいせ

○四季の名類此事

中右より四季の名実とお月おね嚏作と申して
も書け抄し用はされともお月くも家くの常用
して通用あつぬお月とされ禁中の行事
より四季の名を論し神社御園の行はれ
も本も歌の名類も先を嚏作より言ふや
あつれとい嚏作を例し誦言の用らより連言

の附合と儘と一しりいけりしや一の用とさる
 物名もあまふこあれい今此他諸は用あまふ物と
 時代の用捨りやうさまきくもやけぬけずを
 古今の論ある物とあけて今持のるまこと加へ
 し也移うくら我行はるも達の人ありしけり
 名れを凡例とありは月え日より十二月廿五日
 まく彼り小嚏物と用捨りて季細の亦同じ
 あしもやとせらけけ式の制をさるふと或は喜
 しくも秋冬より二季の間はやくさるる物い多き
 とるやうし少きを加へておれと今式の加減と

い或は鉢裏と江陀といひ甚者と服部といひ
 おとなれと今式の留りといひ或は新舊は遠
 秋とありは花よ時多と喜とあまふハおれと今式
 の貴概といひ或は右おのすし用と持て今式の
 有用とさるおれと今式の常用といひ今季を
 新故のきくといひしりて例の古式とわくまは
 くれくと温故知新とやうしまきはらくとやう
 連平の両式より兼載京祇の持はゆるや
 海で紹巴の又百ヶ條あしと書きとあゆ先
 事やとほくはくも同じ身ふおぬかかん

雪解

廿詞ハ古式ヨリ解ルモ消ルモ春ト成セト雪
消テ氏消カニ氏朝夕ノ日ニ結ヒ洗足ノ湯モ
結タラシ三頌ニ春ト定メハ冬ニ用キ詞ナクテ附合
ノ言ト成ル時アラシク夏ニ解ルラ春ト成シ消ルラ
冬ト成ス時ハ消ル物ニ敵シテ消ヘ解ルハ我ト解
ル故ニ冬ニ春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ノ自在ヲ
得テ此等ヲ當用ノ働トヤ云ハシ去ト冬ニ却
ニハ断ルニ及ハス

陽火

此名ハ古式ヨリ新トアリテ諸抄ニ色々ノ説アリト
燃ルト詞ヲ添ヘス氏決シテ春ト定メキナリ解
解

稲妻ノ説ハ連身ノ用ニシテ蜻蛉ノ説ハ節子ノ
沙汰ニヤ○今辨スル物ノ散回ハ散羽習月ノニ字ヲ用
テ同訓別用ト成スヘキナリ散羽ハ木ノ陰ノ散羽ヲ伝
習ハフヒノ田各語ナリ或ハ散羽ト云フ類ナリ然レ
ハ散回モ群スモ散乱ノ助語ニシテ和漢ノ通用
トハ此等ノ及ナリ或ハ莊子ノ野馬遊奔ヲ引テ
遊糸モ陽火モ同意ノ説アリト後諸ノ遊糸ハ俵
詔ノ用ニ非ス増テ野馬ヲ引テ野馬ノ説ハ何ノ俗習
ニヤ論スルニ足ラス或ハ解遊トハ湯桶訓ニテ和訓
モ例ノ覺束ナク解遊トハ連歌ノ詞ニテ何レモ

若葉

古式ニ木ノ若葉ハ夏ト成シ冬ノ若葉ハ春ト成シ
 成シ夏ノ葉ハ總テ新ト成セルナリ然レテ或抄
 ニ花ト若葉ノ二所ニ若葉ニ花ヲ結テハ春氏云イ
 夏氏云ル何故ニ決テ夏ヤ○今按スルニ月花ハ凡雅ニ
 一巻ノ飾ナレハ踏タル物ハ如減シテ四季ヲ自由ニ配一
 ハ若葉ニ花ヲ結テハ決シテ夏ト定レ○猶按スルニ
 世配ハ花ハ春ナリ葉ハ夏ナリ實ハ本ナリ秋ナラ
 其ノ葉ニ若ノ一子ヲ結テ若葉ヲ夏ト成セルニ
 若芽ノ春ナル道理ヲモ知レ然レハ花ハ春夏ニ
 跨テ花ニ郭ムヲ結タルトハ入違タル働ニ世等

ラ如減ノ機ニ夏トハ云一キナリ

残花

世詞ニ古今ノ論アリ然レモ残字ハ其ノ季ナリ
 世季ニ残字ハ残ト云ル道理ナレ花ハ本ナリ
 春ニ決シテ残ハ夏ト定レ惣シテ残葉残葉
 ノ類モ古式ハ一様ナラ又故ニ汁只ハ十色ニ首尾ノ
 百世ニ論ノ断ル時ナレ譬言ハ残葉ハ重陽ニ残レ
 世残葉ハ何ニ残レキヤ残字ハ總テ其ノ季ノ次ニ
 取りテ世論ヲ残字ノ例トスレ秋冬ニ部ニ奉ルニ
 世ニ名ハ和漢ノ遠アリテ詩ニ牡丹ヲ春日ト成
 シ歌ニ杜若ヲ春日ト成セト中右ニ誹諧ノ如減

牡丹杜若

ヨリニ名ヲ夏ニ用スニ初夏ニ花ノ少キ故トフ

松竹落葉

古抄ニ松竹ノ落葉ハ類ナリ常盤木ノ落葉ハ夏ナリト云レト松竹ハ何ニ常盤ナリト云山館

ノ白情ニ殊ニ面白キ物ナリニ只ハ決シテ夏ト定ムレト去レト落ルトハ詩ノ詞ニ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ譬ハ桐葉ノ重ク落テ彼ノ散ル事ニ非ス多ニ妾情ノ論ヲ知ラハ千式万法モ夏ニ明ナレレ

水葉芙蓉

此名ハ新撰ナリ芙蓉ハ和漢氏ニ秋ノ節ニ入レト水葉芙蓉ト云フ時ハ漢ニ蓮ノ一名トワ然レハ條ニ和ケテ水葉芙蓉ト續ス凡芙蓉ト云水

ヲ結スル散ルト云フ詞ヲ添テハ決シテ夏ニ用ナリ秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散ス又物ナリハナリ此類ヲ句作ノ凡例ト成スキナリ

老萱

此式ハ全ク新撰ナリ然レ凡老萱トハ本ヨリ漢家ノ詩ニ出テ或ハ在萱氏乱萱氏總テ暮春ノ物ナレト例ニ今式ハ胡按ヨリ殘萱ニ勿論ニテ老萱モ夏ノ名ト成サハ萱ニ老ノ感情アリ凡雅ハ例ノ麻敷味ト云レ此名ハ夏議ニ據ルナリ

萱附子

此式ハ例ノ當用ナリ○今按スルニ萱子ハ春葉立テ夏詞ハ六月ノ間ニモヲ見テ冬

至ノ比ニ鳴習フ故ニ管字ニ鳴字ヲ結テ冬季
ト成セルナリ然レ其復ハ尚習ニテ或ハ引鳥ノ
親ニ附ケ或ハ笛ヲ以テ引音ヲ教ヘ之管古ハ復
ノ尚ナレハ附子ハ決シテ管ト云イ笛ヲ結テモ管ト
知レ月星日ナリト引声ヲ最上ノ管トセリ

鳥巢

御筆ニ鳥ト都鳥トナ加テ水鳥ハ總テ冬ナト
此ニ鳥ハ歌道ノ秘古ナレハ管ニ記サスト書捨テ
例ノ子細モナク新ナリト云ヘリ○今持スルニ都鳥ハ
指テ能諾ノ用ニ非ス増テ秘古ナレハ論ニ及ハズ
ト云イ管ト云ルハ本ヨリ水鳥ノ用ナレハ巢ヲ結テハ

夏ト決スレ然レニ鳥ノ浮巢ト云ハ古式ニ新ト成セル
夏ハ水中ノ草ニ巢ヲ撮メハ水ノ増減浮沉テ四季
モ其候ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ新ト成セルト鳥
右巢ハ總テ去物ナリ其巢ヲ掛ル時ハ管ナレハ
浮巢ハ決シテ管ト定キヤ巢ニ用ナキハ尚作ニ
依ルレ鳥ノ別名ハ冬ニ部ニ論アリ

翡翠

此鳥ハ詩ニ名アリテ古抄ハ渡鳥ニ入タレト云ノ各
川ニ木陰ヲ傳テ決シテ夏後ト云シ川鱗トハ

沖鱒

此名ハ俗目ナリ或ハ海邊ノ別在ル或ハ船遊
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレハ決シテ極暑ノ各月

ニテ此等ヲ例ノ貴莫能ト云キナリ

反 什 此ニ只ハ字家ノ式目ニ多ク秋ノ季ト成セルハ
案スルニ此ノ字ノ惑ニヤ夏ハ涼ヲ好シ秋ハ冷

ヲ惡ム天地自然ノ道理ニシテ此等ハ甘夏ト決ス
物ニテ古今ノ遠トハ天理ノ次々情ヲ論スシテ文字
言語ノ名ヲ認ル故ナリ是ヲ千式ノ凡例ト知ナリ

○秋之部

花白田 佛軍ニ正花ナリ春ナリ細ニ穿殺軍スル種
ノ理屈アルト此分ニテ四百方能ナリト云ヘリ如何ナル

秘古スニヤ知ラス○今採スルニ花壇モ花白田モ決シテ

秋ニ定キナリ花園ト云ハ竹花ニ似タシ花園トハ
仰向キ白田トハ俯向ク多ク能諾ノ次々ト季ノ種々
ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス此等ヲ今式ノ有用ト知レ

桂花 此名ハ今ノ割用ナリ古式ニ春日ノ季ノ説モアト
地下ノ桂ハ花ノ角ナリ和歌ニモ月光ヲ讀タレ

例シテ月ノ田名各ト成シ秋季ト定ルハ勿論ニテ
四季ノ詞ヲ結フ時ハ四季ノ月ニ用キナリ然レハ
有明 既望ノ名ニ例シテ月モ星モ二句去ク植物
ニモ二句去キナリ

鳥雀橋 古抄ニ生類ニ非スハ 如何鳥ニ三句去キリ 鳩 此詞ハ種々ノ説アリト

紅葉散 此詞ハ古式ヨリ且散ヲ秋ト云イ散トハカリラ 冬ト云レト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニ

花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ苦ナリ増テ 冬散ル木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ此等

ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且字ニハ及向敷ナリ 柏蔽 此柏ハ鳥傘ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證ス

此字見ハ新ト成セシト爰ニ散字ヲ結テハ決メ 秋ト定ヘキナリ ○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルラ六書正諱ニ柏字ハ柏字ノ俗書 ナリトヤ去ルラ大和ノ俗習ニ柏ヲカヤト訓シ柏ヲカハ ト訓シテ此類ノ正俗ハ數多ナレト知テ誤ニ從フラ 固凡ノ故實トハ云レ去ナカラ爾雅ノ註ニ榘有ニ美 實ニ而如柏トアレハ榘モ榘テハ榘字ヲモ用ニ榘ト 柏トハ異字同訓ト云レ或ハ鳥傘ノ設ニ紅葉セ 故ニト云レト桐葉ハ紅葉セ子氏和漢通用ノ秋季 ナリ物思シテ我家ノ自奥名遣ハ新字俗字ノ二論 ヌリ古今ノ西用モ正諱ノ二様モ能證ハ例ノ俗且ニ 從テ今日ノ用ヲ違スヘキナリ

推裡栢

御筆ノ推下ニ紅葉葉セヌ木ナレ氏推トカリモ秋
ナリ或ハ葉モ木モ秋ナリト云テ秋ニ用ル子細
ヲ叙セス然レハ栢ト入遠テ彼ヲ叙トシ是ヲ秋ト志
百世ノ惑心トハ世謂ナリ○今ノ推スルニ推モ裡モ栢葉ノ
名類ハ全ク紅葉ノ沙汰ニ非ス落ルトカ拾フトカ
宜ラ結テ秋トシラ蓮實ラモ實ナリト云レハ古抄ハ
如何トモ其故ヲ辨ヘス

新茗高麦

世式ハ例ノ貴散ナリ奈何トナレハ新茗ハ冬ニ
テ食フハ秋ナレ前後ノ働ヲ貴テナリ去レハ
茶ヲ摘ムハ春ニシテ新茶ハ頂次ニ實ト成セル速

ノ用ヲ知ル時ハ孔子ノ宣給ノ不時ノ議モ其時其物
ノ程ヲ知テ分外ノ珍奇ヲ好カレトク

初鴨

世名ハ全ク新撰ナリ或ハ貴散ニ加減トモ云ハシ
○今ノ推スルニ奉膳ホモ一鴨ト並ナカラ貴スル
所ハ秋冬ノ一差別ナリ去レ見向ノ次第情ヲ論セ初鴨
ト云ハハ推ヲ思ヒ初鴨ト云ハハ味ヲ思フ多シ天取
天取ト云ヘリ辟言ハ初鴨ト音ニ喰ハハ味ヲ先ニ思フヤ
鴨ノ冬ナルハ勿論ニ初鴨字ヲ添テ秋ト成スヘケン

野宮別

世式ハ禁中ノ行事ニ古式ニ世類ハ教多ナレト多ハ
連歌ノ用ニシテ他諸ノ平話ニ通用ナラン然レ他諸

ハ下学上達ノ道ナレハ之ニハ等ノ一各ヲ奉テ公ニ
殿上ノ礼例ト成サハ四季ニハ類ノ各ヲ送^{スクリ}来テ能^シ
曲節ニ用ミトナリ去^レハ野宮ハ護^シト如^ク茂^クトニ在リテ
伊勢ノ齋宮ニ移リ玉^フヲ野宮ノ別ト云^フト去^レハ
四^ノ羅^ノ縁^ニモ哀^ノ傷^ニモ非^ス増^テ意^ニ無^ク常^ニモ非^テ哀
ナル所モ多^クケ^レハナリ

○冬之部

枯尾花 此名ハ古今ニ論^リテ秋^ニ云^フ冬^ニ云^フト枯^ル字^ヲ
結^テハ冬^ト定^シ其^ノ故^ハ名^ノ本^ノ枯^ル字^ト成^レ

名^ノ本^ノ散^ル字^ト成^セル散^ルハ色^{アリ}テ枯^ルハ色^{ナキ}
故^{ナリ}然^レハ名^ノ之^ノ草^モ其^ノ例^ニシ^テ枯^尾花^ハ決^シテ冬^ト
殘^葉 此亦ハ諸抄ニ論^リテ傳^ハ幸^ニハ重^陽殘^リテ秋^ト
ナリト云^レト桃^モ苜^モ其^ノ類^ニ非^ス然^レラ和歌

ノ公亦ニ十月五日ヲ以^テ殘^葉ノ字^ト云^レハ宮内^ノ字
ニ及^ハスレテ決^シテ冬^ト定^シ此^ノ等^ヲ加^テ裁^ノ用^ト云
ハシ殘^葉ノ字^ハ總^テ殘^葉花^ノ例^ニ效^シ

存^ノ鷲 此亦ハ全^ク當^用ナリ古抄ニ秋^ニシ^テ雁^鳥部
ニ入^タレト山^雀日^雀ノ類^ニハ非^ラテ存^ノ鷲^ノニ
物^ニ連^ニス民^ノ家^ノ軒^ニ馴^テ其^ノ防^ヲ傳^ヒ水^柵ニ

遊ユに声ノ清スく冬ハ殊更ニ寒シレ増テ春日帰ルル次女
モ見ミ子ハ決シテ冬ト定シレ此等ノラ姿情ノ例ト云フ

木兔

此木兔ミツツモ例ノ新撰ナリ古抄ハ秋ノ部ニ入レト彼鳥
ニモ非ス名ハ鳥ニモ非ス増テ鳴キ声ノ物ト實ニハ實ニテハ厭ハ

一レ故ニトヤ然ラハ二季ノ加減ト云フ夜鳴ク鳥ノ書用ト
云フ決シテ冬ト定シレ或ハ鳥ノ部ニ類スナカラ新ト成セル
ニ用アリテ此等ハ古抄ノ文覺ト稱スレ

鶺鴒

此鳥ハ倭名ノ火燒ナリ然ルラ古抄ハ渡鳥ノ部ニ入ル
ト其名モ其言ノ朝霜ノ氣色ト云フ秋ニ小鳥
ノ多クシハ冬ノ部ニ跨リテ此名モ加減ト云フナリ

鶺鴒

此鳥モ論セハ新撰ナリ海軍ニ鶺鴒下ニ鶺鴒ト都鳥トラ
加ヘテ新式ニ新ト云フ歌道ノ秘ニ又ナリト至リ例ニ
其故ラ曉サテハ今日ノ用ニ立テ難シ○今ハ梅スニ路鳥モ鶺鴒
モ水ニ甘ク冬ノ差別モ通シハ果ラ結スハ新トモ云フケ
レト鶺鴒ハ鳴キ声ノモ寒ク氣ニテ俗語ニ搔キ井ト云フナレ
ハ能ク諸ニ各目ノ自在ヲ稱シテ冬ニ用アリハ又ニ
用キヤ然ラハ路鳥ノ部類ニ勝リテ例ノ新ト成リ
季子ト成リテ附合自當用ト云フナリ

鶺鴒子

此名ハ古抄ニリ鶺鴒子ヲ結テ冬ト成セレトモ
鶺鴒子トハ各目モ長ケレハ鶺鴒字ナクハ冬ト定

一レ彼ハ冬至ノ此ヨリ鳴習フ故ニ其子ニ冬ノ用
 ハナリ増テ厚ノ音鳴ト云ハ子ノ字ニモ及向敷
 此名ハ俗習ナリ鴨ハ性来ノ道ヲ定テ山ノ尾崎
 ヲ越ル故ニトワ然レハ初鴨ヲ秋ト成レ鴨
 ヲ冬ト成セル各ハ殊ニ能諧ノ用ト云ヘシ

尾越鴨

綿入棉打

古抄ニ綿ノ夏ハ分明ナラス或ハ真綿モ木棉モ
 總テ冬ナリト云ヘト去ルハ附合ノ宝口アリ綿
 ハ本ヨリ新ニシテ綿ハ綿技ノ對ナレハ入字ヲ添テハ
 冬ト定レ或ハ棉打ヲ秋ト云レト綿ヲハ插ト云イ
 棉ヲハ打ト云フ打ハ木棉ニシテ決レテ冬ト定レ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ
 非スト云イ綿ニ海風腸ヲ嫌フノ類ハ古今ノ透
 ナレハ論ニ及ハス然ルヲ綿ト木棉トハ附テモ昔
 カラスト云テ秋綿ト木棉トノ叙文アレト綿ト棉
 トハ異堅切ニテ音訓ニ異日ヲ又ヲ何故ニ附句ヲ
 嫌又ヤ古抄ニハ世類アリテ皆々論スルニ暇アラヌ
 多ニハ綿ノ一名ヲ舉テ一カ法ノ例ト成サハ其外ハ
 推シテ知キ也ナリ

山路塔

此名ハ古来ヨリ論アリテ數冬ハ山路ニ
 宛ルタレト和歌ノ題ニハ山吹ニ用事ナクハ頓

テ大和ノ故實ト成レリ然レハ中古ノ式目ニ六路塔
モ落カモ同ク春ニ用タレトモ各ハ例ノ寄具歌
村脩ノ雪ニ結トモ六路塔ハ冬ト定一シ然レトモ
落カハ漢ニ西夏鳩カ春雪ノ詩ヨリ春ト云ハシ
モ宣ナレト其各ハ指テ佻語ノ用ナシ六路塔ハ祖
春ニレテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

冬瓜
カモフリト訓ニ喚テ中古ハ總テ秋季ト成セリ
去レト幸ニ冬ノニ子ヨリ霜ヲ待テ賞スル物ナレハ
西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ冬瓜ヲ冬ト定一ナリ

雪海

北越ノ各産ニレテ海鳥ノ名向ニ降積ス
ル雪ヲ波ノ折浸ス柏子ニテ凝テ海雪ト成レリ
トフ然レニ雪ヲ里ト訓セシハ古ク青ト云レ美訓
ナラン〇今ハ按スルニ海雪ノ各ハ春甘夏ト復タレハ
雪海雪ト云テ冬ト成サハ例ノ変議ニ及ハスレテ
世等ヲ加減ノ當用ト云一シ

大根引

世詞ハ冬ノ當用ナリ大根ト略シテ音語ニ
讀一シ京家ノ大根引ニ效フ一カラス牛ニ房
モ同シ各類ナカラ引ト云ハスレテ堀ト云フ其各

ハ秋ト知キナリ。〇今按スニ能諧ノ式同ハ新式ニ據
ラス古抄ヲ逐ニス。今日ノ世法ニ遠子ハ其ニ座ニ臨シ
其時ニ從ヒ其故ヲ論シ其為ヲ明メテ自己
ノ理ヲ屈ラズ在サシハ其ノ所ヲ一世ノ血氣ヲ議ト知り
其ノ所ヲ百世ノ明監ト知キナリ
車ニ云ケテ式ノ詠用ト始メ節ノ食ノ公式ト
終メ大根ノ儀習ヲクおノたに十餘條あり
一或ハ連系ノ有用ナク能諧ノ可ク用ナク
一或ハ古今ノ遠同トナリ或ハ季ノ節ノ
加減トナリ或ハ年ノ終トナリ或ハ千式

一方法ノ凡例ナクんニ其ノ中ニ階級ノ微中
を失フト一軍万通ノ様變ナリケテ式ノ序詞
ニテノ違ノ人トナリて其ノ中ニ四事ノ
名れとありハ其ノ能諧ノ誤不誤ト能諧ノ
用ナク用ナクナリケテ式ト格別トテ自己ノ名
といろナクんニ其ノ中ニ其ノ中ニ其ノ中ニ

〇能諧ノ假名はくひ此事

大和ノ假名遣トナリテ其ノ中ニ其ノ中ニ其ノ中ニ
てし作らるる法ありトナリテ其ノ中ニ其ノ中ニ

字中あるより一文字の比北極りありとせしむるを
 世くよついでなかりし或は故実よりおありて志お
 とあふと比こときく撥字をさそふしあひの假名
 あるより一應る中し類字中し音をとねれい訓い
 初の字やとくれり何故に撥れいあひの字は告
 らりや字書よりとせしむるありあひの字を
 歌書にのち教奇より一例の及り印あると故実
 とも或は口傳よりおありて字をさへあひと
 こふよりそのこときく法とつひハおハひ
 たり通音より入書しとせしむるありあひの字をねれい

あひとせしむるより一文字の比北極りありとせしむるを
 世くよついでなかりし或は故実よりおありて志お
 とあふと比こときく撥字をさそふしあひの假名
 あるより一應る中し類字中し音をとねれい訓い
 初の字やとくれり何故に撥れいあひの字は告
 らりや字書よりとせしむるありあひの字を
 歌書にのち教奇より一例の及り印あると故実
 とも或は口傳よりおありて字をさへあひと
 こふよりそのこときく法とつひハおハひ
 たり通音より入書しとせしむるありあひの字をねれい

直名と此配とを辨るにらぶ。のらなるある一かといふ
 のあつらふさむいせとまき假名はむららむれ字を
 とらるるを假名書の特文とみる也。書法
 の字は假名づくけぬれらあはかまむし。とちんせ
 をらむららむらしてはけかか。一室か。例の
 ぬありは似さんにれら。假名ははらむらら。字家
 の口授とて知一まき也或は文句まららる。様。字家
 ち一。みる也。よ。信。一。或は言諸。よ。能。
 てもち。一。ゆ。能。一。と。と。結。一。ら。一。あ。一。と。ち。一。
 の信結。よ。あ。一。け。れ。を。ま。ら。る。一。字。名。の。ら。な。り。て

字假のくまらと考一。流まるあら文うと言。假
 に同訓異用の假名遣あり。上。月。の。中。一。動。い
 下。月。の。中。一。動。い。お。月。む。ね。假。名。遣。の。ま。ら。あ。い
 い。い。み。い。ね。と。か。は。え。一。づ。ち。の。あ。り。一。こ。い。ふ。を
 新制のらなるせ也。一。假名遣らら。の。ゆ。は。の。と。假
 名遣のらなるせ也。一。お。七。ま。ら。一。あ。ら。一。の。ま。ら。あ。い
 の。舞。力。あ。ら。一。よ。こ。う。ま。ら。一。ね。と。假。一。一。人。の。ま。ら。あ。い
 と。ま。ら。あ。い。お。ね。一。は。ら。一。と。假。一。一。例。の。假。名。遣。一。ら
 例の明。假。一。一。か。ら。一。ま。ら。一。と。假。一。一。例。の。假。名。遣。一。ら
 一。一。て。ま。ら。あ。い。の。ま。ら。あ。い。一。ま。ら。一。假。一。一。

〇〇〇
るい

い
い
い
い
い
い

鯉類
鯉類

紅
紅

鹽

塩 塩の味也
或ハ塩の味也

白

白 白の味也

紅

眠

眠 眠の味也

侍

侍

魚

魚 魚の味也

青

青 青の味也

これを故也

〇〇〇〇
いふ

東老云古はよりの歌さやをいふと
いふの二用ありてきこひをいふと
いふの二用ありてきこひをいふと

よ通ひとていふとよよよ通ふ也
音通ふといふと音の二音よ通ふといふ
くと喉牙の二音よ通ひ或は喉牙を
とて歯音の二音よ通ふといふ
音をよとてかきくくの音よとて定ま
これら大和の国曲にて此字よとて
きの助音おひとてこれ我々の音律
此字をよとていふも指すもあれを
和訓よとていふも指すもあれを
いふといふとていふとていふとていふ

して子と假名も又句と言語とに勤く
 勤くね款ありて物名をよき處り勤め
 へ廻醒のおれといふ字せしむるに其類の
 おしおあく物名あれとも假名よりを
 次と名としてふはありて其類をあらわし
 べきとあ。あまて目就とあくる取よ。い
 辰吉の次よああり類の因かふの假名
 あれといひ。を音書の次よああり但し
 吹よとて歌書よしす。類いとおくるれせ
 みのあをちねよ中るとあれしおあ。の

ねとあ。の。い。や。し。ん。假。名。よ。勤。く。し
 勤くねをけかま教ふあれし言語を勤め
 又句を勤くしきよ。い。あ。あ。い。
 の。い。ま。く。も。余。し。け。削。よ。ま。る。と。も。せ。次。よ。ま。む
 下の五品に古書の假名はくひよ散在され
 いかうたまのよなさん△摘撰はくひの假名
 はくひをいとおよを又句と言語とに或は勤く
 と勤くねと或は音と音くねと或は
 上中下よ用ると或は轉重とよ心後と
 或は口傳と故実とせられの假名はくひ

のまじりも和歌の撰集も武之水の軍書
も假名名と直名名とをさへしりしり假名名
はくまくと才とてよまると其書名の用
あれはしりしりも書名もかきんるあり
まろりと今此書名ありと万葉假名と
かきしりしりひらくまき直名名と和名名
又二子二子よまこい假名のあそびのり
とまよふはて假名名をひるしの感得をれ
い人よまよふなりしりしりしりしりしり
されしりしり書名の家よまよふしりしりしりしりしり

の凡流すあふおのりしりしりしりしり
詩号の好悪と撰集よまよふしりしりしり
此我流と撰集よまよふしりしりしりしり
の可啼ふる圓角の二紋よ直名名とまよ
むれしりしりしりしりしりしりしりしり
せくしりしりしりしりしりしりしりしり
まよふしりしりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしり
○ 不 通 直 名 名
○ と 直 名 名 假 名 名

運ニ云世ノ假名はくひのうまふありて古名
はくひのうまふらんけり我門の新制あり
はくを假名直名此くまひありて大和詞
助語をやうけて能讀の文章此亦四條
ありまひりて之後まひりて温觸を假名
の遺稿よりりて彼より五秘の二色む
え祿甲成の結もや伊賀北西舞庵よりりて
後猿蓑の撰集の序にまひりてなり
稿とまひりて十卷篇の註換ありて
前猿蓑の直名文よりりて幻任庵記よりり

龜^{カメ}其^{カメ}楚^{カメ}の文論ありて略^{カメ}云我のりて能讀
の文章と和歌連なりとありて家と一格
ありてとありて漢と四六の文にありて拍子
ありて階級ありてとありて能讀の平語あり
例の直名からありてとありていぬ此^{カメ}羽^{カメ}此^{カメ}
形容と上と能^{カメ}鯨^{カメ}の羽の如く下と錯^{カメ}歸^{カメ}の服
ありてとありて和歌もありてとありて連^{カメ}なりとあり
てありて我のりて源氏袂衣の體ありて詞あり
ありて能^{カメ}ま^{カメ}ん^{カメ}とありて今此^{カメ}文論^{カメ}と直名ありて
返り返りぬの差ありてありてありてあり

ありとも假名とて真名とるるべしとのつ
 大和の文とつらむ今論する幻住庵の記に古語
 の詞とかりあう一係文の起字はるねいふ
 吳楚東南入とてしすれ用のとはま
 云々是れ楚北とてしすれ用のとはま
 入はまもてとてしすれ用のとはま
 人此悔あつて改や真名のおるをのたを
 人ささたてしすれ用のとはま
 今より假名真名めくもつらむとてしすれ用のとはま
 とてしすれ用のとはま

かきとらとてしすれ用のとはま
 ちとてしすれ用のとはま
 又我々の文章と論する湖南の月日
 とてしすれ用のとはま
 是れおりの遺稿の大任ちりたれとてしすれ用のとはま
 秋訓とてしすれ用のとはま
 年をたす月日祖名は秋波とてしすれ用のとはま
 後人の武陵とてしすれ用のとはま
 の點検は後名とてしすれ用のとはま
 了らんとてしすれ用のとはま

の古きものいふに、
 例のるに、
 抄人より、
 了して、
 由と、
 遺稿と、
 廣狹と、
 ひろから、
 さと、
 おを、

ありて、
 けいひ、
 と、
 格と、

貞享式目之終

